

日本通訳学会第1回大会シンポジウム

## 「日本における通訳研究の現状と課題」

---

[日時] 2000年9月23日 午後2:10 - 3:20

[場所] 文京シビックホール会議室

[パネリスト] (各氏の簡単な紹介は巻末参照)

近藤正臣 (大東文化大学)

船山仲他 (大阪府立大学)

鳥飼玖美子 (立教大学)

鶴田知佳子 (目白大学)

相澤啓一 (筑波大学)

司会: 染谷泰正 (ロゴス語学システム研究所/大東文化大学)

---

**司会:** それでは、これからシンポジウムを始めたいと思います。「日本における通訳研究の現状と課題」というテーマで話を進めていくわけですが、まず本日のパネリストについて、ごく簡単にご紹介させていただきます。なお、本日はパネリストの皆様を「さん」付けで呼ばせていただくことにしますので、よろしくお願ひします。まず、あちらから、大東文化大学の近藤さんです。お隣が立教大学の鳥飼さん。それから大阪府立大学の船山さん。そのお隣が目白大学の鶴田さん。最後に筑波大学の相澤さんです。よろしくお願ひします。さて、本日の進め方ですが、まず各パネリストの方々に「日本における通訳研究の現状と課題」というテーマに沿って、思うところを問題提起という形で5分ほど述べていただきます。その後、その中から出てきた共通の問題をいくつか取り上げて議論し、最後に会場から質問を受けるといふ形で進めていきたいと考えています。それでは、まず近藤さんからお願ひします。

---

JAIS 2000 Symposium, "The Current State and Issues of Interpretation Studies in Japan."

*Interpretation Studies* (Special Issue), December 2000, pages 19-41.

© 2000 by the Japan Association for Interpretation Studies.

近藤：今の段階の通訳研究の課題と言え、とにかくより多くの研究をすること、より多くの論文が書かれることだと思っています。つまらない論文がいくらか多く出てもしかたないわけですので、とにかく多くやって、できるだけいい研究を、というのがまず第一だと思います。それから、その次に大規模な研究というのがあります。すでに実は、船山先生のところではかなり大規模な研究をやっておられて、それから、放送文化研究所でも放送通訳に関する研究などすでになされている。僕は、ああいう種類の研究がもっともっとたくさん出て、とにかく、こんな分厚い報告書みたいなのですね、年にもういくつでも、そこら中の大学や研究所で出るとというのが今の段階では必要だと思っています。

そしてその次に、（シンポジウムのハンドアウトの中で）制度的な支援と書きました。支援というのはいろんなやり方があると思うんですけども、制度的といいましたのは、一種の体制、制度、システム、組織、そういうものがあることによって、そこに置かれた人間は研究をしなければならないということに置かれるものがあるわけですね。で、ぼくらのことを考えてみますと、大学にいとたとえば紀要があって、1年に1回くらい、誰も読まないかもしれないけれども、論文を書かなければなんとなく格好が悪い、ということがあるわけですね。僕は、今の段階ではそれが多分必要だと思っています。もちろん、それだけじゃあ駄目だけれども、しかしまあ、そういう、研究せざるを得ないような体制、組織、あり方の中に、もっと多くの人間をぶち込むことが必要だと思っています。

この学会は、そういう意味では、まさに日本の中では通訳に関して論文書けばこの学会で発表できるんだよ、ということになるわけで、それは、そういう意味でも非常に制度的にサポートになるわけで、制度的なエンカレジメントになると思っています。それから、もちろん、大学院というのはそういう意味でも大きな役割を果たしていると思います。大東文化大学では、経済学研究科の中に経済通訳専攻というのがありまして、そこで毎年学生さんが、数人ですけど、いまして、そうなりますと、ひとつは教員が通訳を教えているということになってますから、やっぱり通訳に関して研究しているよ、ということをも自分にも言い聞かせなけりゃいけないし、外にも見せないで格好がつかない。そして、生徒は、必ず卒業するときにはマスター論文を書かなきゃなりませんから、すでに大東でもいくつかのマスター論文が出ていまして、その中に非常にいいものもあるわけです。だから、それも制度的な意味のサポートだと僕は思っています。

最後に書きましたのは、これ当然のことですけれども、通訳というのは、先ほどの話にもありましたけれども、通訳者の仕事というのはそもそもが2つ以上の言語、文化、社会に関わるものですから、ぼくらのやった研究を海外の通訳研究者と交流しない、交換しないというのはまったく意味がありません。それがなければ、ぼくらの存立の基盤がそもそも崩れるということになると思います。これま

では、どちらかというとも海外の通訳研究を消化しようということに、やはり重点があった。もちろん、それだって消化しきれていないと思っています。ものすごい研究が行われているんですね。『通訳理論研究』の最後のほうに水野さんが毎回文献を出して下さっていますが、そんなの、とてもぜんぶ目を通して人、だれもないんじゃないでしょうか。もっとちゃんと、どっかで、そこら中でそういう論文を読んで、そしてその後は、これはおそらく、読むとですね、日本人の立場、あるいは日本語に関係している通訳者の立場から見れば絶対に反論があると思うんですね。それを、もちろん僕たちが消化し、またお互い同士紹介することも必要ですけれども、これはもう外に出してね、そういう論文を書いた人たちに対して、俺達の立場から見ると、お前の論文は面白いけどここが違うとかね、そういうことは言ってあげるべきだと思っている。それをしないと、繰り返しになりますけれども、通訳者としての社会的な活躍をしていて、通訳研究をしようとしているときの、依って立つ基盤が崩れてしまうと思っています。

設立総会の際に、海外との交流はどうするんだという質問をいただきました。これは非常に重要なことだと思って、ぼくはこれをものすごく重く考えています。ただ、実際にやるとなるとなかなか大変で、海外に出て行くのも大変ですし、それから論文を書くのだってやっぱり大変です。でもそれは、これはやろうと僕たちが決めたんだから、そういう交流は深めていくべきではないかと思っています。そういう活動の、一種の全体的な国内の枠組みが日本通訳学会ということで、おぼろげながら、あるいは弱体ながらできたということになれば、これはやはり意味のあることだと思っています。

これまでの通訳理論研究会の10年間、こつこつとやってきましたけれども、こんな形になるとは実はぼくは予想していなかった。ほんとに、二人になってもやろうと聞いていたぐらいでありますので、こんなことになるとはぜんぜん思っていませんでした。しかし、研究会は消えるどころかだんだん大きくなってきて、ここまできた。みんなの中から、やっぱりこれは10年経ったから学会にしようという話が出てきたんですね。これはすごいことだと思います。あと10年経ったら、それは先のことはわかりませんが、しかしまあ、こういう大きな課題がありますので、これからまだ十分、ここでおしまいではなくて、これを新たな出発点として、さらに研究活動をさかんにしていかなければなりません。それを、みなさんが中心になって、そして私も是非参加させていただいて、やりたいと思っています。ありがとうございました。

**司会**：ありがとうございました。では鳥飼さんお願いします。

**鳥飼**：日本における通訳研究について、現状はかなり変わってきているということを上申したいと思います。通訳理論研究会が10年前に始まったときには本当に悲壮な覚悟でというか、二人になっても続けるという、涙ぐましいような意気込みで

始められたわけですけれども、私がフリーの通訳者から大学職に転じたのは、ほぼ 10 年くらい前になるでしょうか。そのときに、いまでも忘れられないことがあります。私が最初に教えました、立教にくる前の大学ですけれども、最初は普通の英語の科目を担当しておりました。でも、やはり私としては、なんとしても上級者向けに通訳に関する科目を持ちたいと思ひまして、それを教授会に提案いたしました。『通訳・翻訳ジャーナル』のような雑誌に、通訳に関する講座を持っている大学の名前などがありましたので、それを全部資料として提出して、通訳入門という形でいいから 1 科目作って欲しいという提案を教授会でいたしました。そのときに、なぜ作るのか、そんなものは専門学校でやればいいことじゃないか、大学という「知」の場で、要するに、知識の、最高レベルの知識を学ぶようなところでやるようなものなのかという、率直な質問が出ましたので、私としましては、通訳というのは専門学校でただひたすら練習すればいいというものではなく、最近に通訳理論に関する研究もなされてきていて、と言いかけたら、「通訳に理論？」と言われてどっと爆笑されたんですね。(^^)

で、そのときに初めて私は、通訳というものがいかに誤解されているか痛感しました。理論とはかけ離れた、大学でやるような筋合いのものではない、つまり、まあ、専門学校でやっていたらいいだろう、くらいに考えられているんですね。だから結局それが仕事にも反映されてくるわけです。たとえば、中身がわからなければ通訳はできないのであるという、ごくごく基本のことでさえも理解してもらえない。で、資料をくださいという、いいから言ったとおりに訳せばいいんだ、みたいなね。そういうことになってくるんだな、というのがひしひしとわかりまして。結論を言いますと、私はそこでめげるようなタイプではございませんので(^^)「通訳入門」は作ってもらいました。そして、やる気のある学生が集まってきたんですけれども、ところが、それからだいぶ状況が変わってまいりました。通訳講座を設ける大学、短大、そして大学院も出てきました。それは、ひとつには少子化という社会的学現象で、各大学がカリキュラム改革を迫られた。生き残り作戦ですよ。で、生き残るためには何をしたらいいか。まず、だいたい大学が売りにするのは英語、英語教育。それも、ただみんながやっているような英語教育をしていたんではしょうがない。何かないか、というときに、やはり今はコミュニケーションに使える英語が主眼ですから、通訳コースがあります、ということがひとつの売りになる時代になってきた、ということです。今はおそらく大学で通訳に関するコースを設けたらいいって、そんなことは、とためらうような大学はあまりないのではないかという気がいたします。ですから、大学という場でも、通訳に関する見方は徐々に変わりつつあると言っていると思います。

それからもうひとつ、国語審議会。いま第 22 期ですけれども、今年の 12 月に答申を出します。審議会も整理の対象ということで、国語審議会は最後の仕事として、

答申を出して消えるわけです。今度の審議会の一番の目玉といいますのは日本語の国際化ということでございまして、これは、おもに日本語教育についてはあるのですけれども、その中でひとつ「通訳」ということが大きく取り上げられています。さきほど西山千さんからご指摘のあった、通訳をする人間を指す時は「通訳者」と呼ぶべきだと言う点。その答申では私がいちいち細かく「者」「者」と入れておきましたので、通訳をする人間を指すときには「通訳者」ときちんとして書いてあります。その答申で問題提起なされたのが、日本の国際化においていかに通訳者の存在が重要であり、通訳というものが日本にとって非常に大切なものであるゆえに、通訳についての研究が大学院レベルでなされなければならない、という点。それから、きちんとした通訳ができるような人材を、これも大学院レベルで早急にコースを設けて育てなければいけないと、いった趣旨のことが、もう少しきれいな格調高い言葉で盛り込まれるはずですよ。

で、その点に関しましても、徐々に現状は変わりつつあります。実は、先ほど近藤さんのお話の中にも大東文化大学経済学研究科の中に経済通訳の講座があるというご紹介がありましたし、それから、小松さんは明海大学大学院で、ひとつ通訳関連の科目をお持ちだと伺っております。それから、常葉学園大学、静岡にあります私立大学ですが、ここも国際言語研究科という大学院を作りましたときに「通訳法研究」という1科目を作りました、これは私が集中講義で担当しております。それから立教大学は、学部レベルでは「会議通訳法」「同時通訳法」を持っております。大学院では文学研究科の中で1科目「通訳翻訳論」を私が持っているだけですけれども、2年後には異文化コミュニケーション研究科という独立研究科の中の1領域として通訳・翻訳関連科目を設置予定です。

それではこれからの課題は何かというと、やはり私ども実際に現場に携わる者、それから教育に携わる者としては、社会の要請や期待に応える義務があるというふうに考えます。それにはいくつかあるんですけども、ひとつは先ほども出ましたように、海外でなされている活発な通訳研究を日本に紹介して消化していく。それがひとつあるでしょう。それから日本と外国との接点にある、そして接点で仕事をしている者たちとして、文化と言葉、コミュニケーションという問題を通訳という切り口から研究していく。これがもっともなされなければいけない。国際関係を通訳的観点から分析した研究があっても良い。それから、もうひとつ。これは先ほど西山千さんのお話を伺いながらひしひしと感じていたんですけども、やはりこの学会としてひとつなすべきこととして、日本における通訳の歴史を洗い直してもいいのではないかと思います。唐通辞から始まりまして、長崎通辞、ずっと連続として続いてきたこの通訳の歴史、そして近代になって、戦後になって大きく同時通訳という分野にまで発展してここまで来たわけです。国語審議会で、通訳の社会文化史的意義ということについての研究がなされているのかという質問がありま

したが、考えてみると、そういう面での体系的な研究はなされていないのではないか。ということで、この面からの取り組みも、私たちの課題として考えていったほうがいいのではないかと考えます。

**司会**：はい。ありがとうございました。それでは船山さんお願いします。

**船山**：私の方は、通訳研究と言語学の関係というあたりをまとめてみたいと思います。しかし、その前に、いま鳥飼さんの方から通訳理論が一笑に付されたという話がありましたので、通訳理論というのをどういうふうにとらえるかということに関し、少なくとも私はこう思っているということ、ひとこと付け加えておきたいと思えます。人間にはですね、直観と呼ばれる能力があるわけですね。この直観というのはとても便利な言葉でして、「そこは直観で処理している」と言えば、わかったような気分になります。要するに理論というのは、この直観としてしかとらえられていないものを明らかにする、明らかにするというのは、ある一定の形式に則って表示する、ということだと思います。通訳理論の研究というのは、直観と言われているところを明示化する、そういうものだと思います。で、通訳研究というのは、もちろんプロセスを理論的に研究するだけではなくて、すでに話の中に出てきている文化史の研究とか、いろいろな関連分野がありますけれども、少なくとも理論研究に関してはそういう直観を明らかにしようとしているわけです。で、時々通訳者の間でもですね、「理論やったって通訳がうまくなるわけでもないでしょ」というような声をよく耳に思うんですけれども、私は、実践に結びつかない理論は目指さない。私自身、目指していない。実践に役立つ理論を目指しています。ただ、まあ、時間がかかります。すぐにすべてを明らかにすることはできなもので、どうしても蓄積というのが必要です。近藤さんが言われたみたいに、とにかく貯めていくということが必要だという全般的なとらえ方をしています。

さて、こういう通訳研究、理論研究に当たってですね、言語学と呼ばれる分野での知見というものがどこまで役に立つか、ということがひとつ気になると思います。で、ひとつ言語学者にとってはジョッキングな話なのですが、こんなことを聞いたことあります。音声認識というのが今かなり進んでます。ひょっとしてお使いの方もいらっしゃるかと思いますが、2~3万円の簡単なソフトを普通のパソコンに入れるだけで、音声を取り取って文字にしてくれるわけですね。キーボードで打つよりもよっぽど速いです。間違いはありますけれども、かなりの速さで、かなりの精度で音声認識をやってくれるわけです。うまく使えば、かなりの精度が得られます。音声認識は、ワープロに使うだけでなく、他の使い方もありますけれども、要するに人間の言語を機械が理解するわけです。これは、とても難しいことで、かなり以前から研究はされていましたが、とても使いものにならない時代がずっと続いていたんですね。

ところが1980年代中頃からですね、ずっと性能が伸びたということなんです。

で、さっき言いましたように、簡単なソフトでも結構いいものが出てきたんです。で、何がショッキングかということですね、1980年代の半ばごろからぐーっと性能がよくなってきた理由は何かということ、それまでは音声認識の研究者は、言語学の知識を一生懸命勉強して、それに則ってやってきた。ところが1980年代の半ばにそれを捨てた、ということなんですね。もう言語学じゃダメだ、と。それで何を使ったかということ、隠れマルコフモデルとかいう、数学の確率論的なモデルなんです。普通の簡単なものでも30ぐらいのファクターを使って計算するようです。要するに、確率論的なモデルを使ってエンジニア的に開発していった。そうすると、ずっといいものできたという話ですね。これは、まあ言語学の分野の人間にとってはですね、非常にショッキングな話だと思います。

それで、通訳研究の分野でも、似たような状況があったのではないかと思うんです。言語学で何かやってるみたいだから、言語学の成果を取り入れれば通訳研究もうまくいくのではないかと。ところが、どうもあまり役に立たない、という時代がかなり長く続いてきたんじゃないかと思います。しかし、言語学の研究も変わりつつある、というのが私なりの結論です。あまり時間がないので簡単に言いますと、大学の授業などでご存じの方も多いたと思いますが、やはり1960年代、70年代、80年代の言語学では、チョムスキーの生成文法というのが幅を利かせていたと言えるでしょう。もちろんチョムスキーの理論はですね、とても科学的なアプローチで、評価すべきところはもちろんあるんですけども、ちょっと言語研究が少し偏った方向に行ってしまった。で、その修正という感じで、認知言語学とか言われるような研究が勢いをつけてきました。認知言語学とはどういうものか、ということをはっきりさせるのは難しいのですが、言ってみれば、生成文法から離れようという試みが認知言語学だという感じもします。認知意味論だとか、メンタルスペース理論だとか、関連性理論だとか、いろいろなものが出てきていて、それで、やや希望が見えてきた感じがします。特に、関連性理論の中で、コードモデルと推論モデルの関係が明確にされ、推論モデルの定式化が試みられています。コードで表わされるものがすべてではない、むしろコードで表わされない部分がコミュニケーションの理論では重要です。その他にも新しい考え方が出てきていて、研究が深まっていると思うんですね。で、そういったことに伴い、いま通訳研究の分野でも新しい動きというものが出つつあるんじゃないかと思います。そういう、言語学の分野の新しい考え方を取り込むこともおもしろくなってきているのではないかと思います。もっとも、まだ未完成といいますか、そっくりそれを持ってくればいいというところまでは行ってませんけれども、かなり取り込めるところ、勉強に値するところというものが出てきているのではないかと思います。

それと、もうひとつは、さっき近藤さんが触れられましたように、海外での通訳研究というのも非常に盛んになっています。これまで、言ってみれば大したことが

できない状況であったのが、かなり実質的な理論研究ができるような雰囲気が出てきた。そして、そういうタイミングでこの日本通訳学会が発足する、というように思います。で、さっき言いました、実践に役立つ理論というのもですね、そう遠いものでもない。全面的というのは難しいにしてもですね。

もうひとつ付け加えますと、私自身の研究、あるいは仲間とやっている研究は言語学に貢献する可能性も持っていると思うんです。言語学の成果を利用するということは大いにやりたいし、やれる状況になってきているということもありますが、逆にですね、通訳研究がリードするというのも、あながち不可能ではないだろうと思っています。通訳研究がリードして、その成果が言語学一般のほうにフィードバックされるという考え方は、まあちょっと欲張ったことなんですけれども、そういうことを私自身は目指しています。でかいことを言いすぎるかもしれませんが、まあ、時間がかかりますからね。でも、少しずつの進歩しかないですけれども、そういう方向を目指して頑張りたいと思っています。

**司会**：はい。どうもありがとうございました。次は鶴田さんお願いします。

**鶴田**：現役の通訳者であり、大学で通訳講座を担当している立場から、自戒を込めて言いたいことがあります。現場で通訳をしている人というのは、通訳の仕事が好きであり、面白いこともあって、ついつい、通訳者の仕事のほうに、ウエイトをおきがちで、大学における通訳教育、またそのためにぜひ必要な理論研究をするところまで踏み込めずにいる、という面があるかと思っています。ですが、私自身が船山さんのいまの発言にありましたように、実践に役立つ理論をこれからますます、やっていかなければならない立場にある、ということは常に考えています。

私は5年前から大学で通訳講座を担当することになりました。これは、先ほど鳥飼さんの指摘にありましたように、大学のほうも少子化という大きな流れの中で、どう対応するか苦慮したことが、結果的に大学における通訳講座が増えていく追い風になった、といえると思います。世界に役立つ魅力的なカリキュラムをくんでいかななくてはならない、英語に力をいれるべきだ、そのためには通訳講座が売りになる、ということでしょう。私の所属しております目白大学でも、言語文化専攻の科目として通訳関係の講座が英語と中国語について設けられています。いま、こういう環境だからこそ、今回の通訳学会の発足を契機として、現場の通訳者であり大学の通訳講座担当者が、熱心に研究に取り組んでいかねばならない、と思います。

通訳教育にたずさわる人間として、それでは欧米ではどういうふうに通訳教育、研究がおこなわれているのか、実地調査をいたしました。去年はヨーロッパの主だった通訳教育機関をいくつか、みてまわりました。そして今年は北米の視察をいたしました。つい、3日まえ、9月20日に戻ったばかりですが、いくつか感想を述べます。

アメリカのカリフォルニア州のモントレイにある、モントレイ国際研究大学院、



ここは国際政治、ビジネスそれに言語・語学教育に並んで通訳・翻訳学部の大学院が設けられている大学院大学です。今日いらしている方々のなかにはこの学校のことをご存知の方がたくさんいらっしゃると思います。ここの通訳・翻訳学部は、たとえばビジネススクール、ロースクールというふうに、実践的な専門教育をするアメリカの大学院らしく、きわめて実践的な形での専門家教育としての通訳・翻訳教育を行っています。就職状況もたいへん良好であると聞いています。そういう大学院でも、3年前から、通訳・翻訳学部長自らが先頭にたって、どのように通訳理論が実践の場に役立つのかを検討する *Readings in Interpretation Research* という講座が始まっています。通訳・翻訳学部では、会議通訳専攻、通訳・翻訳を半々で専攻する通訳・翻訳専攻、および翻訳専攻の三つに分かれるのですが、2年生のうち、会議通訳専攻、および通訳・翻訳専攻の学生は全員この授業を受講せねばなりません。

ということで、この授業は2年生の秋学期（上半期）の必修ですが、さらにこれが二つに分かれていまして、前半が通訳理論を読むこと、後半がプロジェクトに分かれています。会議通訳専攻の学生は、後半のプロジェクトも必修ですが、全部で大体、50人から60人いる各国語（中国語、フランス語、ドイツ語、日本語、韓国語、ロシア語、スペイン語）の会議通訳専攻の学生は全員この授業をとっています。この後半のプロジェクトでやることなのですが、実際に理論面をどのように自分の現場の通訳にとりいれることができるのか、それについて何が実際に役に立ち、何が役に立たなかったのか、自分なりに分析を加えた上でクラスの前で発表する、というものです。こういうことが、年々蓄積されていきますならば、まさに先ほどから出ているような、実践に役立つ理論を形成していく上での財産になっていくと思うのです。こういうやり方は参考になると思いました。

それから、今回の訪問で印象的であったもうひとつの研究は、これは鳥飼さんもいらしたことがあるケント大学で行われている翻訳研究です。最近、IT情報技術の進展がめざましいですが、どのようにして、コンピュータの助けを借りてソフトウェアの現地化を行っていくというような翻訳上の問題について役立てられるか、というような研究をしているところです。ただ、これは機械的に翻訳ができるという意味では決してありません。機械による翻訳、ということではなくて、あくまで人間が通訳をする、翻訳をする上でどのようにコンピュータの助けをうまく借りられるか、という研究です。私も、現場で同時通訳をしているときに、会議の参加者に「すごいですね。どうやって通訳ってできるのですか。頭から、一語一語、全部こう、機械的に変換しているんですか」などという頓珍漢な質問を受けることがありますが、ここにいらっしゃる皆様は決してそうではないことは、よくご存知でしょう。発話者はどういうことを伝えようと思っているのか、と意味を考えながらでなかったら通訳は決してできることではないからです。翻訳にしても同じことで、

その文化的な背景を加味しなかったら、きちんとした翻訳はできません。たとえば、天気予報のようなごく限られた用語の範囲の話だったら別問題でしょうけれども、およそ、政治的・経済的な意味のある内容の発言について、どのようにうまくコンピュータを、通訳者ないし翻訳者が活用できるのかという研究も、これから日本語と英語、あるいはほかの言語との間の研究として必要ではないか、と思います。

機械と翻訳、ということでひとつ思い出した話があります。これは、通訳理論研究の世話人として運営に中心的に携わり、今回通訳学会の理事にもなられた水野さんがやっていたらっしゃるホームページ経由で、ATA（アメリカ翻訳協会）のページにリンクできますので、あるいはごらんになった方があるかもしれません。ちょうどいま、アメリカでATAはフロリダ州オーランドで総会を開催中でして、先ほど話に出たモンレーやケントの先生方もその総会に出席中です。さて、そのATAの会長がクリントン大統領に宛てた手紙というのが、ホームページにのっています。何についての手紙かということ、クリントン大統領が今年一般教書演説のなかで、これだけ情報技術が発達してきたのだから、話をしているのを端からどんどん通訳できるような機械が登場するのも間近いだろう、ということを行ったことについての反論です。ATA会長は、そんなことはとんでもない、という手紙を送っていますので、ホームページでご覧いただいたら面白いかと思います。通訳者が社会的に果たしている役割について、どの程度、社会で認識されているのかを考えますと、そこには多くの誤解があるのに気づきます。これはそのほんの一例です。さらにいうなら、通訳教育・通訳研究のレベルというのは、社会がどの程度、通訳者の役割を大切なものであると認識しているのかということと密接に関係しているような気がします。

たとえばヨーロッパの場合、アメリカの場合、日本の場合、とそれぞれ違います。今回、アメリカに行ってみて感じたのは、アメリカ人というのは、ドルが世界のどこでも通用するのと同じように、英語はどこでも通用すると思っているふしがあります。したがって、外国語ができるありがたみ、英語に通訳している人たちの苦勞をそれほど評価していないのではないかと、と思われる向きがあります。ところで、ヨーロッパのほうは、ユーロという単一通貨にまとめようと政治や経済の面では統合の方向に動いていますが、ヨーロッパ連合では、通訳・翻訳の勞をいとわず、各国の言語や文化を非常に大切にしています。また、その仕事にあたっている通訳者・翻訳者に対する認識や評価も高いと思います。その認識の高さが、また、大学院において通訳教育を行う価値があるものとしてとらえている、それに対しての研究も活発に行う、というふうにつながっていると思います。

繰り返しになりますが、今回、このように通訳学会が発足したのを契機として、現場の通訳者であり通訳教育担当者である私としては、ぜひ、実践に役立つ理論を目指して、微力ではありますが、通訳研究を皆様とご一緒にやっていきたい、と思

っています。

**司会**：ありがとうございました。それでは相澤さん、お願いします。

**相澤**：相澤と申します。売りにならない、英語ではなくドイツ語を代表いたしまして、ひとことお話をさせていただきたいと思います。ドイツ語の場合、非常に圧倒的な英語と比べまして、ドイツ語に限らず、フランス語、中国語など非常に弱小言語の場合には、とくに通訳者の養成ということに大変な問題を抱えてしまいますし、通訳者間のばらつきの問題もありますので、そうした中で、とかく情報が小さく、こじんまりまとまりつつあります。ですから、通訳学会の誕生は私たちにとっても、情報をいろいろ教えていただく上で、非常に心強いものだと思っております。

ただ、通訳学ということに関して申し上げますと、先ほどからお話がでていますが、通訳学ということは、やはり実践に役立つ理論以外のものではありえないであろうと思います。その意味で通訳学は、「よい通訳とはいったい何か」と問うことを究極の目標とする、実践に従属する学問営為となっていくんだろうと思います。そこで、ここでは私は通訳能力と言語能力の関係というものをちょっと考えてみたいと思います。

2 言語以上できなければ通訳ということはありませんけれども、ただ、たとえばバイリンガルの方が必ず西山千さんのようにすばらしい通訳者になるかということ、そういうことは決してないわけであって、バイリンガルの方こそ非常に意識的な言語トレーニングをして初めて通訳者になるということは、通訳者を育てた経験のある人は誰でも知っていることだと思えます。その言語能力に加えたどういう能力が必要なのかということ、つまり、一種の非常に高度な知的総合能力の部分になると思えますけれども、その部分をいったいどういうふうに理論化していくかということに、私は個人的に非常に興味を持っています。

おそらくは、通訳に対して、今まで、たとえば「たかが通訳の分際で」という言い方がされるとか、あるいは先ほどのお話にありましたように、大学で通訳理論をするという馬鹿にされるような雰囲気があったりすること、「通訳の勉強は専門学校でやればいいじゃないか」といった言い方がされるということ、そうした話の基礎には、要するに「単なる語学」というものに対して馬鹿にするスタンスが広く存在しているのだと思います。私は大学のドイツ語の教師をやってますけれども、「語学教師」というのは非常に軽蔑をこめた言い方でもあります。そしておそらくそのこととペアになる現象として、「正しい通訳という行為が客観的にありうる」という考え方があるのではないかと思います。このように、知的営為から切り離れた所に「純粋な語学」とか「客観的な通訳」などというものが存在するかのようによく考えて安心したがる人たちは依然としてたくさんいます。しかし本来、通訳というのは「こういうふうにする」と唯一の正しい答えにいきますよ、たとえば入

試で、英文和訳のような形で「これが正解である。それ以外は間違いである」というような話ではなくて、TPO に応じて、その場その場で正しいあり方が変わってくる。あるいは、「こうやるとこういう反応が出てくるだろう」という可能性が常に多様なものであって、その中から通訳者は、非常に知的な能力をフルに発揮しながら、さまざまな選択肢の中からひとつを選んでいくという決定を常に迫られている、そういう行為だろうと思います。

ちょっと変な喩えを出して申し訳ないんですけども、私、クラシック音楽愛好者なもので、チェリビダッケという非常に変わった、常識はずれにたくさんのリハーサルを要求する素晴らしい指揮者がいたんですが、彼が面白いことを言っていて、「下手くそなオーケストラはあまり練習しなくていい。どうしてかというと、出せる音はひとつに決まっているんだから。それに対して、上手なオーケストラはいっぱい練習しなくちゃいけない。なぜなら、響きはいろいろな可能性があって、その中でどれを選ぶかは曲の構造によって違うんだから、それを練習しなくちゃいけない」と言うわけです。まあ、常識的には、下手なオーケストラが上手なオーケストラになるために練習しなきゃいけないわけですが、その話は彼の念頭にはないわけで、上手なオーケストラが TPO に応じてどういう選択をするか、たくさん練習しなくてはいけない、というのです。たとえば、先ほど西山さんが例を挙げられた冒頭の挨拶の問題ひとつでも、これはいろんな選択肢があると思います。で、その選択肢のどれを選ぶかということに対して客観的に正しい答えはありえないわけですけども、どういう選択をとるとどういう反応になるだろうっていうことを計算して、意識的に選択しなければいけないわけで、「これしかできないから成り行きでやっちゃった」という通訳は、やっぱり彼の言う「下手なオーケストラ」になるんだらうと思います。で、その上手なオーケストラをどういうふうに育てていくか、それが問題になります。模範的通訳というのは決してひとつではないのであって、あるいは入試の英文和訳と違って正解がひとつではない、これは、米原万里さんの有名な「不実な美女か忠実な醜女か」という選択肢の問題でもあるんだらうと思います。

要するに通訳の中で「単なる言語能力」一単なる言語能力というちょっと馬鹿にした言い方になってくるんですけども一単なる言語能力ではない部分で通訳能力、私はこの非常に総合的な、背景知識なども含めた通訳能力というものを言語能力そのものだというふう言い換える時期がもうそろそろ来ているのではないかと思いますけれども、そうした意味での言語能力ないしテキスト能力というものを養っていくために、いったい何ができるかという、そうした通訳理論を考える方向に向かって話を広げていくことができるのではないかと考えています。私はドイツ語の人間ですけども、大学で語学教育をやっている人間にとって、語学教育というのはこうした実践的な通訳の部分とは一般にまったく隔絶されてしまっ

ていまして、とくに英語以外の語学では、まったく職業実践に役に立たない第二外国語教育というのをたくさんやっているのが現状です。まさにそうした知的総合能力という意味における語学能力というのを育てていくという意味で、通訳にかかわりながらも一方で大学教育に足を突っ込んでいる、これを私どもドイツ語の中では兼業農家と言うんですが、そうした兼業農家の人間が、語学教育の議論にも、また通訳理論についても、ある程度貢献できる部分があればいいな、というふうに希望しております。

**司会:** どうもありがとうございました。さまざまな問題提起がありまして、みなさん、もう少し詳しく聞きたい、こういうことを質問したいと、うずうずしていらっしゃるだろうと思いますが、司会者の特権で、私が先にふたつほど質問します。(^^)簡単な質問をして、ひとりか二人の方に振って、それから皆さんにお返しします。まず、通訳研究というのが日本においてはわりと立ち遅れている、今後、いろいろなものがでてくるといいなあ、しなければいけないなあ、というところでは一致しているものと思います。で、今日は若い人たちがたくさん来ていらっしゃるわけですが、今後、通訳に関する研究をしていくうえで、具体的なテーマ、あるいは取り組み方といったことを、若い人へのアドバイスといった形で少しお聞かせ願えればと思います。まず船山先生から、若い人への提言として、こういうようなテーマは面白そうだというような話をしていただけますか。

**船山:** はい。今の相澤さんの話とも関係すると思うんですが、かと言って、どう関係するかということをししゃべり始めると時間がかかるんですが、要するに言語能力にしても通訳能力にしても、見える部分、聞こえる部分、と、見えない部分、聞こえない部分がありますね。つまり、こう話していると、聞こえる部分というのがあるわけですね。私が話している日本語がこう皆さんの耳に届いているわけです。でも、聞こえない部分というのがあります。聞こえない部分というのは、私の頭の中のいろんな処理ですね。で、結局、それがいったいどういう処理なのかというのがまだよくわかっていないわけです。よくわからないというのは形式的に明示化することができないということです。そこで、研究テーマと言えるほど具体的なことではないのですが、ひとつのアプローチとしてですね、この見えない部分、もっと概念的な部分を、遠慮なく考察に取り込んでいってもいいんじゃないかと思います。

つまり、それはどういうことかということ、少なくとも一般の人にはですね、通訳にしても翻訳にしても、元の言語表現があって、出てきた言語表現があると、どうしても、それらの見える言語表現と言語表現を見比べて、正解と言える対応があるんじゃないかと思いがちなんですね。入力側の言語表現と出力側の言語表現を並べると、正解があるように見えるのですが、それは実は錯覚だと思うんです。これはさっき相澤さんもおっしゃったように、見える部分を照らし合わせると、一方にこれこれがあって、それがこちらのこれこれに対応するというような話になるんですが、

実はそうじゃないところがある。それはもう直観的に処理してるんですけども、その直観の中身がわからないということなんです。そのあたりをもっと考えていいんじゃないかと思います。

もう少し付け加えますと、概念的な部分というのは勝手な推測にもなる得るので、それは勝手な推測じゃないかと言われる可能性もあるのですが、それでもめげずにですね、字面だけじゃなくて、もうちょっと見えない部分に注目するような研究態度といいますか、アプローチといいますか、そういうのを遠慮なくやってもらったらいんじゃないかと思うのです。どうしても、証拠を出すにしてもですね、言語化されているものがないと、たわごとと思われるんじゃないかという危惧はあると思います。まあ、実際たわごともあるでしょう。(^^) しかし、たわごともあるんですが、たわごとと、たわごとじゃないものとの区別は難しいというところもありますし、思い切って出せばいいと思います。最初はたわごとかもしれないけれど、そしてそれを実証していくのは難しいんですけども、もっとそういう領域に入り込んでもいいんじゃないかなと思います。ちょっと分かりにくいコメントになったかもしれませんが、まあ、そんなことを感じています。

**司会**：はい。他に何かご意見ありませんか。

**鳥飼**：船山さんが先ほどおっしゃったことで、他領域から学ぶだけじゃなくて、こちらからも、という点について。最初はこちらあまりないわけですから、自分達の体験を踏まえた上で、たとえば認知言語学でも社会言語学でも、異文化コミュニケーションでもいいですし、コーパス言語学、いろいろありますけれども、そういった分野で研究して、そこで得た知見を元に、今度は実践を踏まえながら、何か新しいものが出てくるでしょう。そうすると今度は逆に、その得たものを他の領域に出していったらいいのではないのでしょうか。それくらいのことを考えてやっていきたい、という気がします。

**司会**：他に何か。特にありませんか…。それではもうひとつの質問ですが、通訳訓練というのはどうしても日本では語学教育との絡みでやっているわけですが、ある観点から見ると、その絡みを切らないと通訳訓練はうまくできないだろうということもあるし、しかし、そんなものは切れないだろうという観点もある。これについては、鳥飼さんが、通訳訓練と語学教育の接点ということで、ずいぶんいろんなことを書いたり発言されていらっしゃるんですが、おそらく通訳訓練のわれわれの側から、一般語学教育に提言できることというのは、ずいぶんあるんじゃないかと思うんですね。そのへんでひとつ、これまでに通訳訓練で培われた知見とか、そういうものが一般語学教育にどのように貢献できるか、あるいはできる可能性があるかというところについて、少し意見を聞きたいと思いますが、どうでしょうか。

**鳥飼**：これはもう、染谷さんの分野でもありますけれども…、実をいいますと、国際応用言語学会世界大会が去年東京で開かれたときに、イルグさんが基調講演をなさ

って、まず最初におっしゃったことは、通訳者教育は外国語教育と絡めてはいけない、別物であると。つまり、通訳者教育を始めるときにはもう外国語教育はできているのである、と強くおっしゃいました。で、あとで質問がずいぶん出ましたよね。日本ではそうはいかないんですよ、みたいな話になったんですが、本来的にはイルグさんのご指摘の通りなんですね。しかし残念ながら日本の現状はというと、少なくとも大学という場においては、外国語教育の一環でないと通訳コースそのものが成り立たない面もあります。

ということで、私はむしろ発想を逆に変えて、通訳訓練、あるいは通訳をするために学んだ諸々の技術と呼んでもいいですし、知見と呼んでもいいですが、そういったものを逆に英語教育に応用できるのではないか、と思ったわけです。応用できることはたくさんあるんですけど、ひとつ大きなことだけ申し上げますと、今の英語教育、外国語教育一般にそうかどうかわかりませんが、少なくとも英語教育では、トップダウン式理解ということが強調されています。情報処理にボトム・アップ、トップ・ダウンのふたつの処理の方法があるとすると、今までの日本の英語教育はボトム・アップだけだった。つまり、英語の文章を取り上げて、文法的にどうだ、構文がどうだ、この関係代名詞の先行詞はどこかということで文法的に分析し、知らない単語を調べて辞書を引き、そうやって英文を解釈していく。このボトム・アップ式講読が日本の英語教育だったんだけど、それじゃあコミュニケーションに使えない。これから必要なのはトップ・ダウンである、となってきた。読むにしてもトップ・ダウン・リーディング。ある程度自分が持っている背景知識をフルに活用して、これをスキーマと言うんですけども、そのスキーマを活性化させて、わからない単語があっても文脈から推測していく、パッと読んで大意を掴んでいく、そういった英語の理解方法が重要である、という流れになっているわけです。

ところが、こんなものは通訳者にとってみれば当たり前の話で、もちろんトップ・ダウンでやらなければ通訳なんてできないわけですし、背景知識の重要性、当然でしょう。で、今の新しい外国語教育、特に英語教育の流れの中で、通訳者としてはごくごく当たり前、常識で、いまさら語るまでもないと思っていたことが、あたかも新しい発見かのように言われている。それならばもっと進んでこちらから、実はこれはこうなんです、ということで、やっていくといいのではないかと。あと細かい点では、たとえば同時通訳でサイトラをするときに、意味のまとまりごとにスラッシュを入れて同時通訳しやすくしますけれども、あれなんかは今や予備校では、サイトラとはもちろん言いません、スラッシュ・リーディングと言って、入試の長文読解対策として教えられているわけですね。大学入試の試験監督をしたときに、半分以上の受験生が長文読解になると、サーッとスラッシュを入れ始めるんです。これはどうしたことかと驚きましたけれども、これは予備校でそう教えるわけですね。早く読めるようになるということで、もともと通訳者がやっていたサイト

ラという方法論だということは知らないで、じわじわと「スラッシュ・リーディング」とか「直読直解」とか呼んで浸透してきています。われわれとしては、そういうものをもっとまとめて、たとえば背景知識の獲得方法だとか、ボキャブラリーの増強方法にしても、たくさんありますので、まとめて体系化できる。そういう意味で私は、通訳訓練方法を英語教育に応用できる、と言っているんですけども、逆がなかなかうまくいかない。肝心の通訳教育はどうするのか、これは大きな課題だと思います。

司会：他に何か…

鳥飼：これは鶴田さんも、おっしゃりたいことが…

鶴田：そうですね、今のお話を突き詰めていくと、結局、意味が通じる通訳をするためにはどうしたらいちばんうまくいくのだろうか、なにが必要なのだろうか、ということだと思います。今回訪問した北米の通訳教育機関のなかで、モントレイ、それからオタワ大学でもこういう話を聞きました。いくら実践的な教育をするからといって、通訳教育でも、ただがむしゃらに練習さえすればよいというものではない、ということです。先ほど、下手なオーケストラというお話、非常に面白かったですが、うまくなりたいがために、ともかく練習すればいいというのではない。下手な練習の仕方ではかえって逆効果になる、というふうに2つの大学で同じことを言われました。それをふまえて、英語から日本語への通訳をすることを、英語教育に応用するということでお話するのなら、どうやったら英語を早く正確に理解できるのか、英語教育に、通訳者が普通にやっているような手法でうまく意味が通じるようなコミュニケーションのやり方を応用できるのか。あるいは、通訳教育をする場合でも、どういう練習をさせたら通訳教育を効果的にできるのか。ただただ違う分野、政治やら経済やら、たくさんの分野を数多く練習すれば、いずれ意味がとれるような通訳者に育つだろう、ともかく回数をこなせばすむ、ということではないと思います。それこそ、さっきから出ています、実践に役立つにはどうすればよいかということ、みんなが考えていって応用に結び付けられる分野だと思います。なんか、こういうふうにやればうまく意味がとれる、というようなやり方があるのではないか、その、どこか概念的な部分にはいりこむというお話が先ほど出ましたが、意味を異文化・異言語を超えて伝えている通訳者のやり方が、通訳者教育に、また語学教育にも投影できる部分があるのではないかと考えています。

司会：相澤さんのほうから、何かひとつ…

相澤：ええ。基本的にはもうおっしゃっていただいたと思うんですけども、語学教育と通訳と両方している目から見て、語学教育が通訳の邪魔になっているというのは、非常にしばしば感じます。つまり、入試などで受験生が英文和訳するときには、採点者に対して「私はこのテキストを文法的にわかっていますよ」ということをデモンストレーションするための日本語を作りますね。そうすると「関係代名詞はこう



いうふうに訳すんですよ」みたいなことをやって、そういう訳し方を私たちが通訳のところでやったら通じなくなります。つまり、一文一文をひとつずつ正確に訳すのではなくて、通訳の行為というのは文脈をそのまま意味として通じさせるわけですから、発言全体のイメージを別の言語の世界に渡すということなわけで、語学教育が目指しているものとそこが非常に違う。で、おそらくは語学教育そのものを、そちらの方向にこれからシフトさせていくことを、こちらの通訳の側から提案する必要も出てくるんじゃないかというふうに思います。

**司会：**ありがとうございます。ディスカッションは、実はもう少しやりたかったんですが、一応、ここで予定どおり時間ですので、あと 15 分間、質疑応答ということにしたいと思います。おそらく 3 つぐらい、質問を受けられたらいいなと思いますが、どなたにお聞きするかということ指名していただいたほうが時間が無駄にならないと思いますので、お願いします。…はい。前の方。

**質問：**たくさんあるんですが、じゃあ簡潔に 3 つだけ。(^^) 長すぎたら短く切ってください。ひとつ目は、英語教育対通訳教育の問題。ふたつ目は翻訳理論との兼ね合いです。3 つ目は機械翻訳の将来。まず、語学教育の面に関しまして、鳥飼さんとそれから相澤さんにお尋ねします。先ほど、英語を中心にして国際コミュニケーションの重要性が言われていると、だから通訳教育というふうにとらえているんですが、もし英語が大事であって、英語の教育が大事であれば実は通訳は要らないんじゃないか、究極にコミュニケーションを考えれば通訳はまったくなくなって全員が英語を伝えたほうが日本人のためではないかという理論も成り立つわけですね。この場合、その、語学教育をやったほうが実はずっとコストパフォーマンスは高いんじゃないかという気もします。語学教育と、それと実は語学ができない人がいっぱいいる状況で必要な通訳の教育、この兼ね合いをどう考えられるのか。

2 つ目、翻訳との兼ね合いですが、翻訳と通訳は英語の場合どちらもトランスレーションと言われてますように、非常にオーバーラップする部分が多いと思います。今回は通訳ということで、翻訳にあまり言及されておらず、通訳をたいへん強調されていますが、翻訳理論についてはこれまでもたくさんの蓄積があると思うんですね。今後それとの連携とか、理論を借りてくるとかですね、そういうさまざまな語学教育や翻訳研究との兼ね合いをどうされていくのか。

3 つ目、機械翻訳の将来のことですが、先ほど船山先生が話されたことは非常に興味深いもので、実は私はビジネスの現場で多く通訳とか翻訳とかいたしますが、トップレベルの会議通訳とかをなされている方以外の、現実のビジネス現場では非常に誤訳が多い。通訳も間違いが多い。下手をすると機械で訳したほうがいい。(^^) 最近非常に危惧しておりますが、コンピュータが出てきましてから、訳抜けと、それからコピーペーストによる誤訳が大量に出ます。私が見たところ、もし機械翻訳がこのまま 4~5 年進歩すれば、実は人間のそのレベルの人たちですね、多

分マジョリティーだと思うんですが、翻訳レベルと、まあ誤訳レベルは 10%、20% で変わらなくなるんじゃないかと、いう気がします。トップレベルを除いて、真ん中レベルで翻訳・通訳をやってらっしゃる方を考えるとですね、人間というものが実はボトルネックになるんで、機械翻訳、たぶんここに投資をしてですね、どんどんエンジニアを投入したほうが、もしかすると効率がいいんじゃないかと (^O^) そう思うんですが。

司会：それでは、最初の質問は鳥飼さんにお答えいただくとして、2つ目、3つ目はどなたが…

質問：翻訳との兼ね合いについては近藤さんに、それから機械翻訳は船山さんに。

司会：それでは、そういうことで、お願いします。

鳥飼：では最初の、英語教育を進めていけば通訳者は要らなくなるんじゃないかというお話なんです、これはもちろん日本の話ですよ。これがなかなか難しい。と言いますのは、英語教育をこれだけやっていながら、日本人の英語能力が伸びていないというのが、実は関係者一同の頭痛の種といますか。文部省の英語指導法に関する会議でも、どうするかということは大きな議論になっています。中には、日本人全員は無理だろう、一億の人間全員にコミュニケーションに使えるような英語を教える、それは無理だという人もいます。だから一部の人だけができればいいんじゃないかという議論も出ています。そうすると、でも、デジタル・ディバイドじゃなくて英語ディバイドになるんじゃないか、英語ができない人は損をする、それは人権の問題だという人もいます。議論は果てしないんですが、参考になるのは ELEC という団体、英語教育協議会ですが、ここが Crossroads Project といって、この問題を集中的に検討したんです。これがなかなか面白いもので、この提案は国民をはっきり分けるんです。大多数の日本の国民は中学3年間の英語をきっちり身に付ければそれでいい。実は身に付けていない高校生、大学生、一般の人が多いで、中学3年間といっても大変なんです。中学3年間の英語を本当にものにするといったら、そう簡単ではない。だから高校卒業までのめどというのは、ともかく中学3年までの英語が完全に身に付くようにする。それを最低レベルとして、全国民がそれくらいはできるようにしておく。これは、読む、聞く、話す、書くの4技能です。でも、それだけではこれから日本が海外と丁々発止とやっていくのに足りないから、一部の、自分がこれからは外国と接触して英語を使うだろう、そういう職業に就くだろう、あるいは就きたいと思っている日本人に対しては大学で徹底的に教える。これはもう TOEFL の 500 点なんて言っていないで、600 点以上を目指す。TOEIC だったら 900 点を取る。それから国家公務員に関しては、それを必須条件にして公務員試験を受ける、そこまでするべきだと提案しています。だから、二層化、分けてしまう。今のようにまんべんなく、皆さんやりましょうでやってるから効果が上がらないんだという、非常に抜本的な提案なんです。私も率直に言

って、全員同じようにと言っても無理だと思います。大学で見てましても、相澤さんのドイツ語のような初習言語と違ひまして、英語というのはみんなそれぞれの過去を引きずっているわけですよ。(^^) ですからかなり差がある。中学 3 年の英語の構文さえ覚束ない人もいます。これで小学校から英会話を導入しますと、ますます差が激しくなる。多分、日本の英語教育は混乱の極みになるでしょう。

で、そうしたときに、いずれにしても通訳者の存在は減るということはありません。それから、うまくそのディバイドができてですね、あなたは普通の人 (^^) 中学 3 年までの英語で OK。こちらは TOEIC 900 点、となると、通訳者が要らないのはこの人たちだけですよね。ごく普通の人には、本当に重要な話は通訳者を必要とするでしょうから、結論としては通訳者の重要性は増すことはあっても減ることはない。で、ちょっと飛んで船山さんへの質問に答えさせていただくならば、ビル・ゲイツがこの間立教大学に来た時に、いみじくも言いましたけれども、機械翻訳でできる範囲は非常に限られている。テクニカルな事項、表層的な部分に関しては 2~30 年すればかなりのものができるようになるだろうけれども、広くは外交問題などではどうだろうか。自分だってお医者さんの処方箋の訳を自動翻訳でやってもらおうとは思わない、命が大事だから。(^^) それから、本当に自分にとって大事な交渉で契約書をまとめようなんて話し合いのときに自動翻訳機を使おうとは思わないと言いましたけれども、そういうことで、人間が担当する翻訳と機械に任せる部分と、かなり整理されてくるのではないかなと思っています。

**司会**：はい。それでは翻訳との関係という点について近藤さんにひとこと。

**近藤**：時間がないのでね、ひょっとしたら誤解を招くくらい非常に簡単に言いたいと思います。僕らは、実は日本では翻訳理論の研究ってね、そんなに進んでるとは思わないんですよ。世界はもっと実は僕らが知っている範囲でも Skopos 理論なんてのがあったりして、翻訳という作業を理論化しよう、科学的に研究しようという動きがあります。日本では昔からムーニンとかセイバリとか、それからナイダとか、などの著書が翻訳されていますけれども、しかし翻訳されておしまいですね。それで、日本はたしかに翻訳の経験はありますけれども、それを理論化した作業というのは、ほんとは行われていないのではないかと、極端に言えばね、僕は思います。本当は翻訳と通訳というのは、世界のどこの訓練所でも IT (Interpretation and Translation) というのは一緒になっている。そして教科書のようなものでもね、一緒になっているものがたくさんある。だから本当はやるべきですけども、僕はいまの段階で日本の翻訳理論から学ぼうということはできるのかなあ、というのが正直な感想です。もちろん本来は、翻訳から通訳に関して関係あることは何でも学ぶべきですから、それを学ぼうという当然の姿勢はあります。

**司会**：ありがとうございました。それでは他に…

**船山**：あ、ちょっといいですか。

司会：はい。

船山：簡単に機械翻訳について一言付け加えさせてください。機械翻訳についても、さっきの音声認識と似たところがあって、エンジニアのやり方が変わってきているんですね。最近はかなり賢いものが出てくるようになっていきます。今は用例ベースという考え方が主流のようです。以前は文を切り刻んで、文法、つまり言語学の知識を使って (^O^ ) やろうとしていたわけです。で、どうもうまく行かなかったんで、やはり方向を変えました。今は、一つひとつの形態素をベースにするのではなく、文例をたくさん集めておいて、原文と文例を突き合わせて訳文を出してくる方法を探っています。コンピュータの能力が飛躍的に伸びてきてますから、用例を大量に記憶しておく結構いい出来映えになります。ただ、エンジニアが一生懸命やって、とても賢くなってるんだけど、壁がある。それはみんな感じてると思うんです。エンジニアも感じている。エンジニアはですね、89% の出来を 90% にするという仕事なんですね。90% を 91% にする。それが仕事なんですけど、それがどこまで行くかという、やっぱり壁がある。彼らも自覚していると思います。ビル・ゲイツさんが言ったのもやっぱり壁を意識していると思うんですが、その壁を突破するのは不可能ではないだろう、と私は個人的には思っています。まあそれ以上は言えない状況ですが。

鳥飼：人工知能になってくるんでしょうね。

船山：人工知能にもつながるでしょうし、もうちょっと言語スペシフィックに乗り越える手もあると思います。

司会：はい。それではもうひとつ質問を。…どうぞ。

質問：通訳教育と言語教育の関係ですが、通訳教育が効果的であるための学習者の言語力というのは、私は限度があると思います。そこで、お聞きしたいのですが、通訳教育が効果的であるためのレベルというのは、だいたいどのくらいだとお考えでしょうか。

鳥飼：あの、本当におっしゃるとおりなんで、たとえば会議通訳法なんて科目名を付けたとして、会議通訳者っていったら本当はやはり TOEFL でいうと 650 点、英検では 1 級、TOEIC でいえば 900、そのくらいは必要になってきてしまう。そうすると受講生はいない。( ^O^ ) もちろん何人かはいますけれども、数名の学生が対象では大学の授業としては成立しません。ですから、そこで私は発想を逆にして、通訳者を訓練するのではない、通訳者を養成する方法論を英語教育に応用するのだと考えた次第です。たとえばシャドーイング。通訳訓練にシャドーイングが有用であるかどうかというのは議論の分かれるところで、あれはむしろ有害であると、染谷さんもおっしゃってますけども、一般の英語教育ということに絞ってしまっ、要するに英語の音やリズムをつかむという目的にすれば、これは使える。それから、どうやったらボキャブラリーが増えるのかという点。それは、通訳者がどうやって

専門用語を覚えるかということのを参考に、たとえば用語集の作りかたを教えるとか。それから通訳のときのポイントのつかみ方。ただただだと訳していたのでは通訳にならない。要点を押さえる能力っていうのは、一般の英語教育で練習していくことによって、いままで聞き取れなかったものが聞き取れる、よく読めるようになるということで効果があります。どうですか、大学院では…

**近藤:**大東文化大学の大学院で、要するに経済通訳論ということでやってるんですが、そのときに最初はね、英語ができる基準として TOEFL 650 って言ったんです。そうしたら、みんなに総スカンを食ってね。(^^) そんなの学生くるはずないって言われて。それで、おもてに書く、掲げる看板としては TOEFL 600 程度以上、とかなんとか、そんなことが書いてあるんです。(^^) で、実際にはそれ以上の人が入ってきています。というのは、大学を4年間で出てすぐにくる人の数はそれほど多くなくて、これまでだったら2割ぐらいしかいない。8割ぐらいは社会の経験を積んで、中には翻訳の仕事をもう5年もやってきたなんていう人もくるわけですね。そういうことが必要じゃないかと思っています。だから、ある意味ではまったく一緒です。それからもうひとつ TOEFL とか TOEIC とか、これ自分でライティングとかスピーキングとかやってくれないんだな。で、日本から発信する場合、僕らが日英の通訳やらざるをえません。第2言語に通訳することがいいかどうかというのは、AIC では反対する、国務省ではいいじゃないかと言う、最近、どっかの人に会ったら俺はそっちのほうがやりやすいという、こういう人がいっぱいいる。つまり僕らにとって日英がやりやすいという人がいるんです。でも、その日英の英語のプロダクトがどの程度かという問題は、これほどすごいと僕らが自信を持って言えるものでは必ずしもないわけですね。通訳仲間で、あんまり外にはこれは出せないんですが、僕ら日本語を英語で出しますよね、それをとってフランス語、ロシア語、スペイン語なんかにするわけです。そのブースでね、僕らの出す英語を聞いてわからないんで、ため息ついてるのが聞こえるんです。(^^) (^^) あるフランスの人なんか、僕は喧嘩やったんだけどね、「あなた方のしゃべる英語は私は85% わからない」って言うんです。逆じゃなくて85% わからんって言うんです。だから僕は頭に来て、「冗談じゃない。じゃあ勝手にあなた方が日本語を勉強しなさい。俺達どれだけ英語やフランス語勉強しているか、それでも不十分だったら、どうぞ日本語勉強してください」って言って、そしたら拍手喝采浴びましたけどね。だけど、まあ現実には日英をやらなきゃいけない、日独もやらなきゃいけない。その、英語で出す、ドイツ語で出す、フランス語で出す、やっぱり、これからは考えざるをえない。EUだって、もう第1言語に通訳するだけじゃできなくなっちゃってるわけですね。だから、それはもうひとつ、小松さんがおっしゃっていた点と同時に付け加えておきたい。趣旨はまったく同じで、それに1点付け加えたいと思います。

司会：もっといろいろ議論したいと思いますが、このあと発表者の方が2名おられます。その時間に食い込んでしまってもいけませんので、本日はこのくらいにしたいと思います。

鳥飼：あの、ひとつだけ付け加えたいことがあるんですが、今ので…

司会：あ、はい。どうぞ。

鳥飼：小松さんの質問に対して、私は発想転換して、要するに英語教育としてやっているんだと申しあげましたが、実はそうやってやっていくうちに育つんですね。実際に少しずつ育ってきているんです。英語教育の一環としてやっているんだけど、通訳について非常に興味を持つ学生が、たとえば30名いれば2人か3人くらい出てきている、という意味において無駄ではない。そうやって裾野を広げていくということも必要かなと思いますので、それだけ付け加えさせてください。

司会：はい。それでは今日はこのくらいにします。それで、5分ほど時間が押しておりますので、永田さんのプレゼンテーション、5分おいて25分からでよろしいですか。それでは25分からということで。本日はどうもありがとうございました。  
(拍手)

## ネリスト紹介

近藤 正臣（大東文化大学：経済発展論、経済通訳論）

[主な論文・著書]『開発と自立の経済学』（同文館 1989）；『文化・言語・発展途上国』（北樹出版 1989）；その他、通訳関係の論文多数。現在、大東文化大学大学院経済学研究科において経済通訳論を担当。

船山 仲他（大阪府立大学：理論言語学）

[通訳関連で特に関心を持っている研究テーマ] 同時通訳の認知的プロセス [主な通訳関連論文・著書] 1. 「同時通訳の認知的側面を構成する要素について」『同時通訳における情報フローの認知言語学的検証』（平成10-11年度科学研究費補助金研究成果報告書） 2. 「同時通訳と認知言語学」（月刊『言語』1997年8月号, Vo1. 26, No. 9. pp. 28-35)

鳥飼 玖美子（立教大学：英語教育、通訳翻訳論）

[通訳関連で特に関心を持っている研究テーマ] 1. 通訳訓練の英語教育への応用 2. 異文化コミュニケーションとしての通訳 3. 通訳の社会文化史的意義 [主な通訳関連論文・著書] 1. 「英語教育の一環としての通訳訓練」 2. “Interpreter Training and Foreign Language Teaching in Japan” 3. 『ことばが招く国際摩擦』The Japan Times, 1998.

**鶴田 知佳子**（目白大学：時事英語、通訳教育と語学教育）

[通訳関連で特に関心を持っている研究テーマ] 1. 語学教育との接点 2. ストレスと通訳の質の問題 3. 時事英語 [主な通訳関連論文・著書] 1. 「和製英語についての考察」（目白女子短期大学紀要） 2. 「放送通訳について」（目白女子短期大学紀要） 3. Interpreter Education and Training at the Graduate and Undergraduate University Levels in Europe -- What Interpreter Training Courses in Japan Can Learn from Them. 『通訳理論研究』17 (第9巻1号), 2000. pp. 68-84.

**相澤 啓一**（筑波大学：現代ドイツ文学、ドイツ語）

[通訳関連で特に関心を持っている研究テーマ] 1. 異言語媒介と異文化媒介 2. 状況や文脈にふさわしい訳出表現の多様性について [主な通訳関連論文・著書] 1. 「異文化コミュニケーションにおける通訳者」（月刊『言語』1997年8月号 Vo1. 26, No. 9. pp. 67-75） 2. 「日独通訳の現状とドイツ語教育」（来年刊行のドイツ語教育関連論文集に所収予定）

**司会：染谷泰正**（ロゴス語学システム研究所／大東文化大学：コーパス言語学、ビジネス英語、国際語としての英語習得論） [通訳関連で特に関心を持っている研究テーマ] 通訳訓練技法の一般外国語教育への応用 [主な通訳関連論文・著書] 1. 「通訳訓練手法とその一般語学学習への応用について」 『通訳理論研究』11 (第6巻2号), 1996. pp. 27-44. 2. 「プロソディーセンス強化訓練の効果に関するアクションリサーチ」 『通訳理論研究』14 (第7巻2号), 1998. pp. 4-21. 3. 「英語通訳訓練法入門セミナー」 『通訳事典'94』 (アルク) 1994. pp. 100-149.